

演 アジアの経済

講

榊原英資

小山理事長 定刻でありますので、ただいまから講演会を始めます。

本日の講師は、大蔵省財政金融研究所長の榊原英資さんです。恒例に従いまして、初めに講師の経歴等を簡単に紹介いたします。

榊原さんは、昭和三九年に東京大学経済学部をご卒業になり、翌年大学院を経て大蔵省に入省、お若いころ、ミシガン大学経済学部に留学され、また国際通貨基金職員に派遣されるなど豊富な国際経験を積まれ、その後も昭和五二年に埼玉大学助教授に出向、昭和五年にはハーバード大学客員教授に就任されるなど、多彩なご経歴をお持ちです。その後、理財局の国債課

長、総務課長等を経て、平成二年、東海財務局長、平成三年から国際金融局担当の大臣官房審議官、国際金融局次長をお務めになり、昨年七月に現職に就任しておられます。

榊原さんは、最近も、このほど決着を見た日米包括協議の金融サービス分野の共同議長を務められるなど、内外にわたって活躍されており、大蔵省を代表する国際派官僚の一人として知られています。

本日は、その榊原さんに、「アジアの経済」というテーマでお話いただくことといたしました。ご清聴をお願いします。

どうもご丁寧なご紹介、ありがとうございます。きょうは「アジアの経済」ということで話をしろということでございます。私、最近研究所長になりまして、アジアの国と接触する機会が割にふえてまいりました。特にアジアの専門家というわけではございませんけれども、アジアを中心にいろんな話をさせていただきたいと思っています。

一、八世紀から一八世紀——商業主義的なアジアの時代

多少アカデミックな話から始めますと、アジアというときに、一体どういうパースペクティブでアジアを見るかということが非常に大事だと思っております。私を含めて、恐らく私より若い方は戦後教育を受けておられますが、戦後の歴史教育はある意味では非常にバイアスがかかっていたという感じがいたします。

もともと世界史というのはかなり西洋中心主義といえるかと思いますが、大体私どもの習った世界史は、ギリシャ・ローマがあって、その後にルネッサンスがあって、それから近代西洋、そういう形で世界史を西洋の近代を中心に理解するという物の見方であろうと思います。これは日本の歴史家だけの責任ではなくて、実は一九世紀、二〇世紀くらいの西洋の歴史家とか哲学者の典型的な物の考え方です。

しかし、戦前にアーノルド・トインビーが一一巻くらいの大著『歴史の研究』というのを書いておりまして、あの時期、シュペングラの『西欧の没落』とか割にそういう見方がはやっておりましたが、少し西洋中心の史観というのを見直さなきゃいけないということをかなりはっきりいったのがトインビーでございます。彼は、今まで二一の文明が歴史の中に存在して、その時期で六つく

らしいの文明が残っている、文明の興隆と没落という視点で歴史を見なきゃいけないということをいったわけでございます。

トインビーは、もちろん戦後もずっと生きておられますけれども、『歴史の研究』を書いた最初のころというのは一九四〇年代でございます。そのときに彼がいていたのは、今の歴史の見方に三つのイリュージョン、日本語訳ですと「迷妄」と訳していますけれども、三つの迷妄がある。一つは西洋中心主義で、西洋中心に歴史を見るという見方である。もう一つは東洋の停滞、東洋が変化しないという迷妄である。もう一つは、歴史というのは非常に直線的に進歩するんだ、そういう迷妄である。三つの迷妄ということをアーノルド・トインビーがいつていますけれども、恐らくそれを非常に典型的に受けて歴史観を展開したのがマルクスだと思えます。

マルクスは発展段階論を唱えるわけです。一番原始的というか、一番クルードな社会がアジア的な社会である。アジア的というのは、明らかにメソポタミアとかインドとか中国を意識してそういつているんだと思いますね。それから古代的、これは恐らくギリシャ・ローマを意識してそういつているんだと思います。それから封建時代があつて、資本主義があつて、それから社会主義だ、こういう発展段階論を彼がいつたわけでございます。西洋のいろんな歴史観がある中でも、トインビーのいつた最もイリュージョンの多い見方、最も発展段階論的な見方だと思えます。日本の歴史学者というのはこのマルクスの発展段階論の影響を非常に強く受けております。

戦後、パージが行われましたが、実は一番パージされたのは教育者なんですね。大蔵省は九人しかパージされてないですけども、内務省、軍閥

係及び教育者が非常に多く、教育者で特にやられたのは歴史学者でございまして、左以外の歴史学者のかかりの人たちがページされた。その当時は逆に皇国史観なんていう非常に極端な右の歴史学派もありましたから、そういう人を含めてかなりページされたということがあります。

そういうことで、恐らく戦後の世界史というのは大体マルキストが書いた世界史だと考えたら間違いないと思います。ですから、別にそれはマルキスト、左翼の世界史観だということではなくて、さっきの三つの迷妄ですね。要するにアジアはおくれている、アジアの一つのコロラリとしての日本はおくれているんだ、それから西洋が中心なんだ、発展というのは一直線で、最終的に西洋的な文明、そして最後は社会主義にいくんだ。大体そういう基本的な歴史観に貫かれた世界史を我々学んだものですから、我々の意識の根底のど

こかに、アジアというのはおくれているんだという意識があるんですね。日本を含めてですけれども、日本より以上にアジアはおくれているんだという意識がある。これは決定的な間違いだと思うのです。歴史を非常に素直に見た場合は、西洋が先進国であったのは産業革命以降であって、産業革命以前を見ると、恐らくアジアが先進国だったということとは、非常に事実に近い見解でございまして、近ごろそういうことをいう人はかなりふえてまいりました。

証券会館でこういう話をする人は余りいないのかもしれませんが、歴史を簡単にたどってみますと、要するに最初はエジプト、メソポタミア、インド、中国という四大文明があるわけでございます。その後をたどってみても、ギリシャで都市文明が発達したころは、哲学でいうとソクラテスの時代ですけれども、孔子と釈迦が大体同じ

時期に出てきていますね。中国ですと春秋です。インドでもまだ国家統一はできていませんけれども、いろんな形で文明が出てきている。大体ギリシャの都市文明のときは、インドにも中国にも、それに相応する文明が出てきているということでございます。

ローマはカルタゴには勝っていますけれども、ローマの統一はたかだか地中海沿岸から北アフリカです。アラビア半島ではローマは負けています。シーザーがブルータスに暗殺されるときは、パルティアに出征する前でございますが、パルティア王国というと、どちらかというとイスラムに近い。その当時はまだイスラム教はありませんでしたが、パルティアに負けておりますし、サザン朝ペルシャにも負けております。大体ローマの時期というのは、ローマが一つの文明圏をつくり、それにサザン朝ペルシャがあり、インドも大

体その時期に統一されています。チャンドラグプタが出てきて、インドはマウリヤ王朝、あるいはその後グプタ王朝ができますけれども、インドの統一が大体ローマのころできる。中国史で見ますと、秦の始皇帝が大体ローマの時代です。中国もそのときに国家統一ができるというわけでございますから、ローマの時代というのは四大文明が世界で併存していた時代、中国、インド、ペルシャ、ローマ、ということでございます。

その後をたどってみても、ルネッサンスがどういう時代だったかということでございますけれども、そこから西洋は封建時代に入るといってでございます。

ローマ以降、四大文明が並立していた以降というのは、どちらかというとイスラムの時代になるわけでございます。イスラムのアッバース王朝ができるのが八世紀でございます。たまたまイスラ

ムに関する本がこのごろたくさん出ていますけれども、イスラムの専門家が非常に怒っていましたのは、テレビなんかでイスラムとかアラブの話をすると、すぐ砂漠が出てくる、ラクダが出てくる、けしからぬ、イスラムというのは都市文明だ、典型的な都市文明がイスラムであって、イスラムはどこ都市化した文明を早い時期につくったところはない、要するにベドウィンの連想でイスラム文明を連想するのは日本人の全くおかしな歴史観であるといっていますけれども、アッバース王朝は大変な都市文化を築いたわけでございます。既に八世紀に常備軍ができていて、官僚制度ができています。このごろ官僚制度というのは評判悪いですが、れども、近代国家というのは官僚制度が完備していることが条件でございます。また、どうも官僚には貨幣で月給を払っていたということでございますから、貨幣経済もかなり発達していた。

実はイスラムが都市文明であるというのは、もう一つは、イスラムの文明というのは非常に経済が発達していた文明だということです。恐らく最も早い時期に貨幣が広範囲に使われたのがイスラムでございますし、商業活動が非常に盛んであった。ですから、イスラム商人というのは、八世紀にアフリカからアジア、それも東南アジアまで来ておるわけでございます。イスラム教というのは金利をつけちゃいけないんだといわれていますけれども、あれはどうも間違いのようでございまして、高利を取っちゃいけないということで、ご承知のようにイスラムの世界は手数料という形でちゃんと普通の金利を取ります。要するに商業が非常に発達していたので、コーランの中に商業道徳の一部が入っていたんだという言い方をイスラムの専門家はするわけでございます。

そういうことで、アッバース王朝が八世紀から

一〇世紀くらい、その後オスマントルコなんかにずつつながっていくわけでございますけれど

も、八世紀以降の中世はイスラムの時代だったという事です。ここにイギリスの方もたくさん来ておられますから、余り西洋をばかにするようなことをいうつもりは全くなりませんけれども、十字軍というのは、イスラム側から見ると、あれは野蛮人が攻めてきていろいろ略奪をしたんだという事のようにございまして、それはどちらから見るとかということで大分違いますけれども、少なくとも近代西洋文明の原型はイスラムにあった。イスラムもご承知のように一神教で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教というのは似たような宗教です。そういう意味では実はローマの後に出てきたのがイスラム文明であって、それが西洋文明のいわば前身であったということが、現在の専門家の間では常識になっております。それがある意

味での商業文明の基礎をつくったということでございます。

さらに時代がたちまして、同じようなことがいえるわけでございまして、東洋について言うくと、東洋で非常に商業文化が栄えた、あるいは科学技術、文化が栄えたのは宋でございます。私どもはルネッサンスの三大発明は黒色火薬と羅針盤と印刷機だと習ったわけでございますが、これは全部宋で大体一〇世紀から一二世紀の間に発明されておるわけでございまして、宋が相当の商業文化を發展させた。ご承知のように宋銭というのは日本まで来ております。室町時代なんか宋銭を使っていたということでございますから、貨幣経済も相当発達していたということでございます。

一七世紀、一八世紀になると、中国は明と清の時代でございますけれども、実は清のときに今の華僑ができています。清のときに一億人く

らしいの人口が三億人くらいに急増しまして、その急増した結果、かなりの中国人が清から東南アジアとかインドに出て、今のオーバーシーズ・チャイニーズとか、華僑ができたわけでございます。同じように商人が外国に出たという意味ではインドも同じでございまして、インド人の中にもオーバーシーズ・インディアンというのがあって、今でもアフリカまで及んでいます。ウカンダあたりはインド人が相当おりますし、ご承知のようにインドネシアとかマレーシアとか、こういうところはインド人がずっと昔から定住しております、インド商人が東南アジアからアフリカまでずっと出たということでございます。

大体八世紀から一八世紀を見ると、イスラム商人、中国商人、インド商人が活躍した、大変な貨幣経済、あるいは今のはやりの言葉でいえばグローバルな経済圏が実は成立していた。そのネッ

トワークをつないでいったのは、実はアラビア商人でありインド商人であり中国商人だ。後で中国の話をさせていただきますけれども、今そのインフラストラクチャーが中国では大変生きてきたわけでございますけれども、これは歴史的に大変古いものでございまして、そういうネットワークでアジア経済が発展した。

ですから、新大陸の発見なんていわれた一五世紀、一六世紀のころは、実は世界の経済の中心はインド洋であつたわけでございます。インド洋でアフリカから東南アジアに大変な経済があつたということでございます。一八世紀の貿易統計を見ましても、ヨーロッパはみんなアジアに対して大変な入超でございますね。中国からは絹、絹製品、お茶、チャイナと呼ばれるいわゆる陶磁器。チャイナから出てきたから「チャイナ」というわけでございます。インドからは香辛料とか、お茶、綿

製品、綿ということ、今でいうとヨーロッパは大変な赤字国で、それを何で払っていたかという、新大陸から金と銀を持ってきて、その金と銀でアジアに対する貿易赤字を埋めていたということとでございます。そして新大陸にはアフリカから奴隸を持っていた、いわばそういうパターンの三角貿易が成立していたわけでございます。

新大陸の発見というのも随分西欧中心的な見方でございまして、あそこにはインカ文明もマヤ文明もインディオの文明は隆々として栄えていたわけでございますから、発見というのはひどいじゃないかということを、今になってそういう人たちがいうのは当然でございます。一五世紀、一六世紀で大変問題だったのは、一五世紀に南北アメリカの人口が大体三五〇〇万いたのが、実は一六世紀に一〇分の一になっちゃったのですね。これはインカなりマヤなりの文明を滅ぼした、相当虐待

したということもあるのですけれども、それ以上に疫病が非常にはやった。それ以前はヨーロッパとアメリカの間はほとんどインターアクションがなかったわけですが、疫病がはやって人口が一〇分の一になっちゃった。それで新大陸は労働力が足りなくなりました、それを補てんするために、アフリカの西海岸から奴隸を連れていった。これは北米もそうですし、南米も、ブラジルなんかに入って、今の混血ができているわけでございます。

そういうパターンでございますから、八世紀から一八世紀というのはアジアの時代だった。しかもアジアの時代というと、マルクスの非常に帝国主義的なダイナスティの支配があったというイメージを我々持っているのですけれども、これは非常に商業主義的な世界だった。ですから、ある意味ではコモーション・キャピタリズムという

か、商業資本主義がそこに成立していたと見た方が、恐らく正確であろう。これは後につなげようと思っておるのですけれども、これから実はそういう時代が来るんじゃないかということを私は申し上げさせていただこうと思っておるわけでございます。

アジアの時代でもう一つおもしろいのは、イスラムというのは結局インドにも帝国をつくるわけでございまして、イスラムの支配が相当進んでいきますけれども、八世紀から一八世紀というのは、割に文明が併存しているのですね。宗教でいうと、それこそキリスト教もイスラム教もヒンズー教も儒教も仏教も、お互いにお互いを滅ぼすという形じゃなくて併存しておって、それを商人のネットワークがつかないだ。貿易量からいっても大変な貿易があって、人の移動もあった。インド人なり中国人なりが世界に散る。イスラム商人も世界に

散る。そういう形があった。実はそういう時代があったんだという認識が、我々日本人には決定的に欠けているような気がいたします。ですから、日本にとってもアジアというのは先進国ですし、長い歴史を見ますと、日本の文化というのはほとんど中国から持ってきたわけでございます。弥生・縄文の時代はあるわけでございますけれども、大体七世紀くらいに隋とか唐から入れた。その前に若干朝鮮半島を通じて来たということでございますから、アジアというのは実は日本にとっても先進国ですし、西洋にとってみれば大変な先進国だった。

実は、これもかなり定説になっていますけれども、産業革命というのはアジア経済に対するコンプレックスから始まったんだということをいう人が非常におります。どういふことかというところ、事実関係で申しますと、一七二〇年にイギリスで

キャラコの使用を禁止するのですね。その当時、インドから綿製品が大量に入ってきて、イギリスの貿易赤字が大変大きくなる。これはいかぬというので、キャラコの使用を禁止して、インドからの輸入を制限するわけです。ですから、非常に保護貿易的な政策を一八世紀の初めにとって、今でいうと輸入代替産業の育成ということをイギリスがやるわけでございます。その輸入代替産業の育成のプロセスの中で、いろんな綿織物の機械が出てきて、それで産業革命が成立したんだ、かなりの人の間で、そういうことではないかということがいわれ始めております。

ですから、インドに対するいわば輸入代替政策が成功して産業革命が行われたんだ、そして産業革命以降は、イギリスから綿製品が輸出されるという形で、完全に逆転するわけでございますが、それまでは、イギリスというか、ヨーロッパが輸

出していたものは羊毛と毛織物だけで、ほかは余りアジアに輸出することができなかったという世界でございますから、アジアというものをそういう形で位置づけてみると、かなりよく物が見えてくるという気がいたします。

村山さんがこの間ベトナムに行って、外務省には知恵者がいるなと思って聞いていたのですけれども、村山さんがベトナムの首相におっしゃったことで、向こうが非常に感激したことがあります。日本というのは、今度戦争に負けたけれども、今までずっと戦争に負けなくて、しかも植民地化されたことは一度もない。一度だけ植民地化の危機があった。それは蒙古が攻めてきたときだ。蒙古が二度来襲して、あの二度ではほとんど限界になってしまっていたから、三度目に来襲したら、日本は恐らく蒙古の領土になってしまっただろう。ところが、実は蒙古が来襲しなかったのは、

その後、越南に負けているのですね。今のベトナムに侵入いたしまして、ベトナムに負けておる。

ですから、村山さんは、ベトナムの首相に会って、日本が今まで独立国でおられたのは、おたくが蒙古を破ったからだといったら、向こうが大変感激したという事でございますけれども（笑）、歴史をたどってみますと、アジアの国とは実はいろんな形でのインターアクションがあったと思います。

ベトナムと日本にしても、かなり昔、恐らくいろんな形での商業的なつながりがあったんだろうという気がいたしますから、その辺をたどって、これからのアジアがどういう時代かということを見るのが非常に重要だという気がいたします。

二、アジアにはソフトのインフ

ラがある

サミュエラ・ハンティントンという人が、一年半くらい前に「文明の衝突」という有名な論文を書きまして、冷戦が終わった、イデオロギーの時代は終わったんで、これからは文明が衝突する時代だということを言っておりまして、トインビーの議論と似ているわけでございます。ハンティントンは、世界に七つから八つの文明がある、その文明の間である意味での衝突が起こるのは、これから二十一世紀だ、特に彼は、イスラムと儒教が連合すると大変だ、そういうことを書いて大変話題を呼んだ論文でございますけれども、僕はハンティントンが正しいと思うのは、冷戦の終わりというのは新たに各文明間のインターアクションというか、そういうものを前面に押し出してくる可

能性があるということでございます。

冷戦というのは、ハンティントンの言葉をかりますと、「西洋文明内部の内戦」でございます。彼は「シビル・ウォー」という言葉を使っておりますけれども、これは西洋文明内部の内戦であって、西洋文明内部の内戦は終わった、社会主義は滅びた、どちらかといえばリベラルなデモクラシーというか、資本主義的な市場経済というか、そういうものが勝ったんだ。それはそれで、恐らくそういうことなんだろうと思いますけれども、これからはまた違った局面に入ってくるだろうということをおるわけでございます。

私にいわせれば、実は一八世紀くらいまでは文明の時代だった。西洋がアジアに進出してきて初めて西洋文明がほかの文明を支配するというか、ドミニートするというか、そういうパターンができたのが一九世紀、二〇世紀でございます。です

から、ここ二〇年くらいがむしろ歴史の中で例外であって、圧倒的な技術力と軍事力で西洋文明がほかの文明を圧倒した、そのプロセスの中で第一次世界大戦が起こり、第二次世界大戦が起こり、冷戦が起こった。

第一次世界大戦、第二次世界大戦あるいは冷戦というのは、西洋文明内部の内乱ですね。文明内部のシビル・ウォーであった。そのシビル・ウォーが、人類の滅亡を危惧させるようなポジションにまでなってしまった。こういうパターンで考えることができるんだと思います。そうすると、恐らく冷戦の終焉というのは、僕は西洋文明が没落するとは思いませんし、そのかわりにアジアとか日本が出てくるということでもないと思いますけれども、少なくとも文明的にいろいろなものが共存していく時代に入ってきた。ですから、フランス・フクヤマという人が「歴史は終

わった」という論文を書いたのですけれども、私は、凍結されていた歴史がこれから始まるんだ、少なくともアジアとか日本の視点から見ればそういうことになるのではないかと思っておるわけでございます。

そういうことで、ある意味では西洋的な文明が相当行き詰まっているということは確かでございます。まして、先進諸国どこを見ても、みんな構造的な問題を抱えている。日本もそうですし、アメリカもそうですし、ヨーロッパもそう。アメリカは、あれだけ経済パフォーマンスがよかったのに、クリントンは選挙に負けちゃった。つまり、アメリカ経済の問題というのは、成長率が低いとか、失業率が高過ぎるとかいうことじゃなくて、実は社会が分裂しちゃっているという基本的な問題を抱えていて、それが経済成長だけではどうも解決しないという話になってきている。ヨーロッパは

ヨーロッパで、社会福祉国家が行き詰まって、その中で高い失業率がどうしても下がらない。ある程度景気回復してきても、いまだフランスは一二%の失業率、イギリス、ドイツは八%、これが大きく下がっていく気配はない。そういう感じが出てきて、財政は余りよくならないという感じでございます。

日本は日本で、いわば戦後のシステムが崩壊過程に入った。最後に大蔵省がやられると、ちょうど全部だめになるということじゃないかと、非常に傲慢な大蔵官僚はそう考えておるわけでございます(笑)。ある意味では、いろんな今までのシステムに日本もがたが入ってきたということで、今ある種の崩壊過程に入っていて、政治改革で政治がだめになりましたから、恐らく小選挙区は政治をさらにだめにするだろうと私は思っています。行政改革というものは行政をだめにするだろうと

思いますし、産業のリストラなんていうのも企業をだめにするんじゃないかと思っています。今、改革といわれていることは、すべて改革される主体をだめにするという、そういうプロセスに日本は入ってきておりますから、先進国は軒並みだめだ。

そうなってくると、これからの世界経済を考えてみた場合、どうしてもアジアが一つの中心になってくるだろうという話になる。人口的に見ても、中国は一二億、インドが七億くらいになっている。ベトナムが七〇〇〇万、インドネシアが二億に近い。そういうわけですから、世界の人口の六〇%くらいがアジアにいるわけでございます。

それから何といってもアフリカなりラテンアメリカと比べて大きいのは、アジアにはソフトのインフラストラクチャーがあるということです。つまり、今までの商業文明の遺産が残っていること

でございます。ですから、アジアが新たに資本主義に移行するというのはおかしいと、僕は外人の方に会うといっているのです。これはリターン・ツー・キャピタリズムであって、トランジション・ツー・キャピタリズムではない。コモーション・キャピタリズムというのはアジアに確実に存在したんだ。ですから、今の中国が割に資本主義への移行がうまくできているのは、明らかに華僑のネットワークがあるからです。華僑のネットワークというのは、清の後半からできている、もっと正確に言えば、明の後半から華僑というのは出ているわけです。

この間テレビを見ていましたら、新華僑というのがあって、最近出たのがいるんだとか何とか、いろんな話がありますけれども、その時代からのネットワークというのがずっとできているわけでございますから、それを今稼働すればいいわ

けてございます。

中国人というのは、もともと日本人なんかと違って大分個人主義的といわれていますが、ただ、イギリス等の財産権は個人に属するという形の所有制個人主義とは異なり、財産権はどちらかというと家族という感じになって、家族を単位にものを考えるということでございます。韓国なんかになると、宗族ということになるのかもしれないけれども、家族とか宗族を単位にした、ある種の非常にアグレッシブなアントウルブルヌールシップというのが、中国には伝統的に存在しているわけでございますね。

ですから、その伝統的に存在しているのを、今まで共産主義で縛ってきた。それをちょっと外してやれば、これは相当の活力が出てくる。出て来過ぎていることが今問題だということなのかもしれないけれども、活力は既にそこにあるわけ

ですね。新たにアントウルブルヌールを育てる、例えばロシアの場合なんかですと、アントウルブルヌールがないじゃないか、育てなきゃいけないじゃないかという話になるわけでございますけれども、中国の場合には明らかにそういうものは存在するわけでございます。

教育云々ということをしていまして、人口が非常に大きいのと、それから儒教の伝統があるようなところは、教育に対する一つのフレームワークができております。私もこの間ベトナムに行って大変驚きましたのは、ハノイの真ん中にお寺とっては何ですけれども、文廟というのがあって、そこに石碑が立っております、一五世紀くらいから科挙の試験に合格した人の名前が全部彫ってあるわけでございます。科挙の試験に合格するというのは大変なことだったんだろうと思います。今のフランスのエナで、トップの二〇番に

入ったというくらい価値があることでございまして、それが漢字でずっと彫ってあるわけでございます。ですから、科挙の試験の伝統というのがかなりあって、僕はベトナムがもうちょっと発展すると、恐らく受験戦争が始まるだろうといっているのですけれども（笑）、受験戦争がこんなに小さいうちから激しいのは日本と韓国ですね。これは儒教の影響で、ベトナムも恐らくそういうことになるでしょう。

この間も大変驚いたのは、ベトナムで、ある商社の方にいろいろ工場を見せてもらったのですけれども、彼が、ベトナム人というのは大変なものですよ、彼の運転手さんが夜、英語の学校に通っている、東南アジアには各地に行っていたけれども、運転手さんが英語の学校に通っているのはベトナムだけですよとおっしゃっていましたが、これもやはり一つの文化的な伝統だと思いますね。

いわば広義の儒教圏みたいなものがあって、これが家族の連続性を非常に大事にしますから、そういうプロセスの中で教育というのは非常に大事にする。だれかを教育して、その人を偉くして、それで家族が栄えるんだという話でございます。

これもちょっと次元が落ちますけれども、香港で、ある中国通の方と話しておりましたら、中国人は偉いと彼はいうわけですね。いろんなことがあって、家が落ちぶれると、女性は夜働きに出るけれども、大体働きに出ると、自分の弟とか自分の親族とか、そういう人を一生懸命学校に入れて、そこに送金して、そいつを偉くして、それで家族がということになるけれども、日本で、銀座で働いているようなやつは、自分でぜいたくしているだけだ、大分違うということをおっしゃっていましたが、そういう基本的な伝統みたいなものがある。

ですから、ソフトのインフラということでございますけれども、ソフトのインフラが大変残っているというか、それが連綿として続いている。共產主義とか、第一次大戦後のいろんな形での欧米の強い影響力の中で、そういうものが抑圧されていたという部分はありますけれども、それは厳として残っているわけでございますね。そういうものがこれからずっと出ていくんだろう。そういうプロセスにアジアが入ってきているんだと思いますから、そういう意味で私どもがアジアとつき合うときには、むしろ向こうが先進国なんだという意識が必要です。

この間たまたま香港で話をさせられました、そのときに話したのは、日本というのはアジアではあるんだけど、ちょっとほかのアジアとは違うんだ、ちょうど日本はヨーロッパにおけるイギリスと似ているんじゃないかということを言っ

たわけです。まず、非常に地理的に似ている。日本は、大陸があって、大陸の横にある島ですね。イギリスというのも、ヨーロッパ大陸があって、横にある島でございます。ですから、イギリスというのは、ヨーロッパの一部ではあるけれどもヨーロッパではないみたいところがある。どうしてもヨーロッパというところがある。どううか、ゲルマンとラテン系のフランスということでございます、独仏同盟みたいなものができれば、これがEUの中心、今やそうなっているわけでございます。ですから、サッチャーでなくても、どうしてもイギリスはEUに入ることに若干の逡巡がある、常にあるという形でございます。

日本も全くそういう感じで、アジアの一員ではあるけれども、アジアと若干隔絶された形です。と歴史を送ってきたということ、しかし、中国文明の巨大な影響下にあったという意味では間違い

なくアジアだということですから、私どもはむしろアジアに対してそういった若干へりくだった気持ちを持ってつき合う、そういうことが非常に重要ではないか。我々はマルクス主義的というか、西洋中心的な歴史の影響を受けて、日本は西洋の一員で、アジアはそれより下だみたいな感じを持ちがちだったわけですし、持っているわけですけれども、それは全く違うんじゃないかという感じがするわけでございます。

三、近代化を果しつつ自国の文化を維持した日本が手本

それでは、アジアで今どういうことが起こっているのかということですが、そういうインフラストラクチャーがあったところに、東西冷戦の桎梏がとれたということでございますから、中国は相変わらず共産主義といっておりますけれ

ども、イデオロギーの桎梏がほぼとれた形になる。インドなんかでも大体そういう感じになってくる。ベトナムでもそうですね。今でもベトナムはまだ社会主義国でございますけれども、そういうものがとれてきて、本来のアジア的な、商業主義的な物の考え方が戻ってきている。いろんな形での統制を若干ずつ緩めることによって、エネルギーが出てくる。ですから、新たにエネルギーを育てることじゃなくて、ふたをしてあったのがちょっとふたを取るということで、アジアのエネルギーはいろんなところで出てくるという状況になっているんだと私は理解しております。

とはいえ、ただ、ここで私どもにとって重要なことは、伝統的にヨーロッパの影響力というのはアジアで非常に強いですし、アメリカの影響力というのはやはり圧倒的に強い部分があるわけでございます。

きょうもたまたま招待状が来ていまして、北京でシンポジウムをやるから来いというものでした。その案内状を送ってきたのがロバート・マンデレというコロンビア大学の先生ですけれども、その下に中国人の生徒がいるのですね。その中国人の生徒が、恐らく中国政府からお金を取って、アメリカの経済学者をたくさん呼んでセミナーをやるというような、そんな企画があって、ちょっと違ったことをいうやつを一人くらい入れたいんでお前も入れというから、そんなの嫌だといって、私はお断りしました。

戦後アメリカがこれだけ大きく世界に影響力を持ったというのは、社会科学の分野、特に経済学とか社会学に関連する分野でアメリカ的な物の考え方が世界をおおった。専門的な言葉でいいますと、新古典派経済学というのですけれども、新古典派経済学の物の考え方がかなり世界的な物の考

え方の基本になって、イギリスなんかでも、昔はオックスブリッジだったですけれども、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスというのが非常に力を増してきた。フランスでも、大体エナを出ているのが今でもエリートでございますけれども、MITなんか出てきた人が若干出てきているとか、日本は圧倒的にアメリカの経済学というか、アメリカの社会科学の影響下にある。アジアなんかでも、大体伝統的にはイギリス留学でございますけれども、戦後はかなりアメリカ留学の方がふえてきているわけでございます。

ですから、アジアの指導者のかなりの部分はアメリカ留学帰りという人が多い。これは中国を含めてそうでございます。中国を含めてアメリカの大学で学んでいるということであり、非常に新古典派的な経済学を身につけておりますから、基本的にレッセ・フェール、自由放任だという考え方

でございます。中国でもテクノクラートという若いレベルの人は、アメリカに留学して英語がかなりできるという人が多うございます。私どももよく北京なんかに行って会議なんかいたしますと、日本語と中国語の通訳というのはかなり大変で、ちゃんと訳してくれるのかなんて思っていますけれども、若い人と会うと英語がすっと通じるということが、中国ですら相当出てきておるわけでございます。

この間ある中国の人とお話ししまして、日本にも少し留学生を送ってきたらいいじゃないか、優秀な人を留学で送ってきたらどうですかといったら、実は工学の部門には優秀な人を結構送っていますというんですね。日本はエンジニアリングは結構進んでいるという理解をしていて、エンジニアリングの部門には送っているけれども、経済学や政治学等社会科学は送ってもしようがない、日

本に送っても、日本の大学でアメリカの経済学を教えている。アメリカの経済学を学ぶならアメリカで学ぶ、それは当たり前のことだというから、それはそうだなと私も思ったのでございますけれども、そういうことで、大量の学生が実は中国なんかを中心にアメリカに行っておるわけでございますね。それで、アメリカ的な物の考え方を身につけて中国に帰ってきている。ですから、北京でも、マクドナルドに行ってコカコーラのボトルを飲んでるのが非常に格好いいという感じでございますから、アメリカの消費文化あるいはアメリカ的な物の考え方がかなりいろんなところに相当広がっているということは事実でございますし、一方でそういうことを説く人たちも非常にふえてきているのも事実でございます。

ただ、私どもの研究所なんかに、それはまた私どもだけじゃなくて、これは例えば東証なんかに

もあると、この間長岡さんがおっしゃってしましたけれども、東証とか通産省とか外務省とかいうところにも、いろんなアジアの国から技術支援の話が非常に来ているのですね。技術支援というのは、特にテクノロジーとかなんとかいうことじゃなくて、私どもの場合ですと、税制をどういうふうにしたらいいかとか、金融制度をどういうふうにしたらいいかとか、産業政策をどういうふうにしたらいいかとか、為替管理をどうしたらいいか、ということですよ。中国もそろそろ為替管理を考えているようでございまして、投資にはいい投資と悪い投資があるから、どうやって分けたらいんだ、戦後の日本の為替管理をちょっと学びたいんだけれどもなんていう形で来ておりますけれども、そういうことで、実はこれは中国だけじゃなくて、ベトナム、ミャンマー、インド、あるいは中央アジア、そういうところが軒並みそういう

ことをいつてきているわけでございます。

これはどういふことかと申しますと、彼らが非常に自然体でありますと、若い人たち、国際的な人たちというのは、主としてアメリカ留学あるいはイギリス留学というところでございますから、そうなってくると、大体ロシア型の改革をやるという形にいくわけでございますね。ところが、彼らはロシアを見ていますから、ロシアみたいになったらかなわぬ、ロシアみたいになれば時の政権は崩壊間違いないですから、これはどうしようもない。何かオルタナティブがないかということで探しているという感じが非常に強うございます。そのオルタナティブを見ると、うまく西洋化とか、近代化をやりながら、何かその国の文化とか伝統をそこそ守っているのは日本だ。官僚もそこそ今のところは強そうだ。だから、おれたちもそう早いうちに首を切られることもないように

するためには、日本のことを学んだらいいじゃないか。

官僚の話は冗談でございませうけれども、明治維新以降、そこそこ近代化、西洋化をしながら、その国の文化を維持したというのは日本だけですね。要するにインドはある意味で近代化を拒否していますし、ほかのアジアの国は植民地化されちゃったというプロセスがあります。植民地化された後には社会主義で非常に被害を受けたというところでございますから、そこそのレベルの所得水準を身につけながら、なおかつ日本人というか、そういうものであり続けたというところに彼らは非常に興味があるわけでございまして、別に日本的なものをすべてを学ぼうという気があるわけではないですけれども、どうやってうまくやっているんだ、そういうことを学びたい、あるいは、ロシアでやったようなことに対するオルタ

ナティブが本当にあるのかどうかということを探りつつある、そういうことではないかという気がいたします。

私も、たまたま去年の一二月くらいにベルリンである国際会議があつて、ヤブリンスキーという人が、今どこかの政党の党首で、この次の選挙には出るということでございますけれども、彼がディナー・スピーチをして、ロシアは改革の名のもとにすべてを失った、ちょうどチェチェンにエリツィンが侵攻するときでしたから、残ったのはエリツィン独裁とマフィアの支配であるといっていました。彼は政治家ですからかなり極端なことをいっていますけれども、それにしてもロシアはそれに近い状況になってしまった。改革を主導したジェフリー・サックスというのは、ハーバードで私と非常に仲のよかった男で、今でも懇意にしていますけれども、彼なんかを含めて、ロシアの

改革は失敗だった、失敗だったのはおれの責任じゃないとジェフリー・サックスはいつていますけれども、しかしそういう感じになっている。

そうすると、これからアジアがどういう形で改革を進めていくのかということは、彼らにとつては非常に重要なことで、実は我々にとつても非常に重要なことだと思えます。中国がロシア化してしまつたら、日本はえらいことになるわけでございまして、完全に、ある意味でコンテインされた状態ならいいですけれども、こういう形で中国がある意味ではエクスプロードしてきて、それがロシア化をしたら、隣国である日本にとってはえらいことになるわけでございますから、そういう意味では、彼らがロシア的でない改革路線をどういうふうにくまなくマネージしていくかということについて、我々が協力しなきゃならない部分というのは、私は非常にあると思えます。しかし、これ

はかなり難しいことではないかという気がするわけでございます。

例えば、若干中国のことに沿っていわせていただきますと、今中国が一番心配しているのは、所得の格差がこれだけ拡大してしまったということです。農村で農業生産性が上がらない。一時は土地を貸すことによって非常に活性化して、あるいは今まであった過剰労働力みたいなものを郷鎮企業という形で農村の中小企業にして、それで農業が活性化したわけでございますけれども、その後がどうもうまくいかない。ことしなんかかなり食糧を輸入しております。事実、食糧が足りないという状況になってきた。農村と一部の沿岸地域との格差をどうやって埋めていくかということが非常に重要になってきている。

それとの関連で、今中国政府が非常に興味を持っておりますのは分税制です。日本に地方交付

税という税金があるのはご存じでございましょうけれども、地方交付税制度を入れたいんだけれども、どうやって入れたらいいかということで、来週あたり向こうの主税局長が我々のところに来ますけれども、要するに日本のように国税で全部吸い上げて、吸い上げた後で相対的に貧困な地域に交付税という形で税をつける、そういうことをやりたいと考えているようでございすけれども、中国のように地方があれだけ実的に強いところで、それがどれだけできるのかという話だと思ひます。

もう一つは、インフレが二七%になってしまつて、これを彼らは、マネタリー・コントロールと呼んでいるわけでございますけれども、中央銀行制度を何とかつくて、中央銀行制度でうまくそれをコントロールすることを考えているわけでございます。この間、中国の専門家というか、儒教

の専門家が、「榊原さん、それは中国では歴史的に無理です。大体中央銀行の概念というのは、この二〇〇〇年くらい、お札を刷るところというパーセプションがあつて、マネタリー・ポリシーをやる場所というパーセプションはありません。すべての中国の王朝はみんなインフレで滅んでいきます。」本当にそうなのかなと思ひましたけれども、そんなことをいっておりました。

そういう意味で、インフレの問題は大変重要な問題で、そのインフレをどうやってコントロールするのか。どう締めていくのかということですが、これも、締めたなら今度は国营企業が倒れてしまうことになります。三角債と今いわれておりますけれども、借金のツケ回しみたいなのがありますから、そういうものの中からどうやって抜け出していくかという話がある。

その中で、もう一つ彼らが考えているのは、投

資の選別をしようということです。不動産投資はいい、どちらかというとプロダクティブな投資、

しかも沿岸地域じゃなくて内陸の方に投資を入れたいということでございまして、投資の選別ということを考えている。そうなってくると、ある程度為替管理せざるを得ないことになってくるわけですが、といって今のような状況で変に為替管理したら、みんな外資が逃げちゃう、そういう状況でございますから、その為替管理をどうやってするかということです。

ですから、どちらかというと、我々が戦後日本でやってきたような若干のコントロールみたいなものをこれから入れていかなきゃいけない、そういう話になってきているわけでございます。システムとしてはなかなかできないのですけれども、その中で彼らが始めたのが、首都鉄鋼公司の、例の香港の二代目の逮捕です。恐らくあれはこれか

ら次々起こるんだろうというのが通説でございます。

つまり、ご承知のように、中国というのは、大体系リーダーの二代目は全部どこかの企業とひっついておりますし、これらが大変な蓄財をしているわけです。鄧小平から始まってすべてそうですけれども、例外はあります。朱鎔基なんていうのは余りそういうことをやらないようですし、喬石なんていうのも余りそういうことをやらないようです。そういう例外はありますけれども、大体二代目というのは、アメリカあたりに留学しておって、英語を大変よくしゃべって、華僑とつるんで商売をやって、それで大もうけしていて、今度つかまった彼なんていうのはイギリスに相当競馬馬を持っているとか、牧場を持っているとか、我々の感覚でいうと大変な大金持ちでございます。それを、どちらかというと一罰百戒的に

挙げていって、挙げていくことによってコントロールを強めることに對する反対を牽制する。恐らくそういうポリシーをとるのではないかと私は思っております。それがどのくらい成功するのか、派閥抗争みたいなことになるのか。私も中国のポリテックスにそれほど通じているわけではございませんからわかりませんが、恐らく中国は今後そっちの方向に行くだろうという気がいたします。

恐らく私はそっちの方向に行っているんだろうという判断をしているわけでございまして、これは皆さん、まゆにつばをつけて聞いていただければいいのですけれども、私は官僚でございしますから、こういう時点では、どうしても中央のコントロールが必要だという感じになります。確かに広東とか広州とか上海とか、ああいう非常にダイナミズムのあるところ、そういうところがそれなり

に発展していくというのは必要ですけども、それが完全に独立愚連隊になり、閩東軍になってしまつて、中央のコントロールから離れるということとは、中国でそれが起ると国の分解だろうという気がするわけですね。

ですから、ある意味では、これも別に僕は社会主義者でもなんでもないのですけれども、共産党の支配というのは絶対に維持しなきゃいけない。要するに共産党がなくなると、全国をオーガナイズするユニットがなくなる。ですから、共産党と軍というのはかなり重要なポジションになっていますね。中国の軍というのはみんな商売していますし、大体軍とつるんで商売するのが一番いいようでございます(笑)。そういうことはともかくとして、一つの全体をコントロールするユニットみたいなものが実は残っている、その中でトランジションをやる、そういうプロセスが非常に重

要だと思うのですね。

ゴルバチョフの最大の失敗は、コントロールするユニットを最初に崩しちゃったわけですね。それで自由化するものですから、もうかるのはアメリカのコンサルタントだけという世界になったわけでございます。IMFがいろんなリコメントーションを出せなんていったって、文章を書ける人がいない。文章を書くために証券会社とかいろんなコンサルティング・ファームに頼んでお金を出して、それで彼らに改革案を書いてもらうというプロセスでございます。

あるときG7Dという会議をやっております、アメリカでいいますと財務次官なんかが集まってやったときに、カナダの財務省の次官が非常に怒っております。おれたちが援助しても、みんなコンサルティング・ファームにいったっちゃうんじゃないか、どうなっているんだということを

いっておりますけれども、実はかなりの部分が欧米のコンサルティング・ファームとか証券会社に流れてしまっているわけでございます。

四、日本の果すべき役割

私、そろそろ皆さんの商売の話をしなきゃいけないわけでございますけれども、これからアジアで重要なことというのは、どういうプロセスでも知的支援が非常に重要になってくると思うのですね。知的支援ということで深くその地域に入っていれば、別に癒着とかなんとかいうことでなくて、それが商売にはね返ってくるという話があるわけでございます。

例えばインドネシアには、ハーバード・グループが入っていて、その後リーマン・ブラザーズが政策の決定に非常に深く入っていったわけですが

ね。そういうところに入っているというプロセスを通じて、いろんな局面で商売に結びついてくる。そういうプロセスがあるわけでございます。

私は今の立場ですから、ちょっとバイアスがあるのですが、日本がこれから重要なことは、日本全体としてそういう知的支援をすることではないかという気がしているわけでございます。例えば証券会社でも、ただアジアの証券市場に行って、国営企業を民営化させて、その証券を売ることではなくて、本来の意味でのインベストメント・バンキングみたいなことが必要なのではないか。つまり、向こうの政府にある程度入って、それと一緒にプロジェクトを組成して、どこかに工業団地をつくり、そのファイナンスングをやる。そういう形のインベストメント・バンキングというのは、僕はこれからアジアで可能だと思えますし、ベトナムなんかで若干野村証

券がそういうことをやっております。ハイフォンの近くの工業化にかなりおって、そのためのファンド・レーシングをしているということでございます。トランジションに入っている国との組み合わせというのは、我々もそうですし、民間においてもそうですが、本来の意味でのプランニングというところはかなり入っていきながら、そのファイナンスをどうやるか、そういう世界ではないかという気がいたします。

よくアジアということをいうときに、皆さん、東京市場の規制の緩和が大変重要である、そうではないと……という議論があります。東京証券市場の規制の緩和そのものは決して大事でないと思いませんし、我が証券局長も一生懸命やっておりますと聞いておりますから、そこそこ進んでいくと思いますけれども、重要なのはそういうことではないという気がしておるわけでございます。香港

とかシンガポールと競争して、若干株の先物とか債券の先物の取引が東京に戻ってきて、しかし、もう一つくらいイギリスの証券会社が今度は東京マーケットで取引してつぶれることになるのがいいのかどうか（笑）ということでごさいますて、いわば出来合いの商品みたいなのを右から左に動かして、それでアジアで商売するという発想は、恐らく違うんだろうという気がいたします。

先進国の中ではそういうことがあるのかもしれないけれども、今の中国とかベトナムとか、さらにはインドとかミャンマーとか、そういうところに入っていくときには、私は今大蔵省とか外務省と話して何をやるかということを考えているのですけれども、アジアで一番大事なことは、うんとお雇い外人として日本人を送り込むことだといっておるわけでごさいます。日本の明治維新のときというのは外人がたくさん入ってきて、それ

が少なくとも初期にはいろんなアドバイスをしたわけでごさいます。そういうアドバイスを受けたという要望が、実は無数に來ているのですね。

私なんかも、皆さんの中でそういうお知り合いがいたらぜひ教えていただきたいのですけれども、ベトナムに行つて金融のアドバイスをしてくださる方がいたら、一年くらいぜひ来てくれとベトナムの財政省にいわれております。もちろんあいう国はいろんなところにアドバイスを頼んでいるわけでごさいますて、当然ベトナムの場合にはフランスには頼んでいる。それから、IMFも頼んでおつて、IMFのレジデント・リプレゼンタティブがいる。あるいは場合によるとアメリカに頼んでいるとか、あるいはどこかの証券会社に頼んでいるとか、いろいろあると思うのですね。いろいろあるんですけれども、そういうものを受けけるだけの能力がこっちにあるかどうか、受ける

だけのシステムがこっちに整っているかどうか、それがそろそろ我々問われているんじゃないか。政府のレベルでいえば、これがまさにアジア外交だろうという気がするわけでございます。

もちろんODAは相当出しているわけでございます。ODAを出していても、このごろ文句ばかりいわれて、円高になって冗談じゃない、半分くらいにしろなんてことをいろんなところにいわれておるわけでございますけれども、政策をある程度アドバイスするという形で政府の中に入っていく。その政策のアドバイスというのは、ある意味では工業化ということを考えておるわけですから、おのずからプロジェクトの組成につながる。あるいは場合によれば金融機関をつくることにつながる。あるいは場合によれば取引所をつくることにつながる。そういうことでいろいろアドバイスをしていく。

証券取引所をつくるといっても、中国はそうなっちゃいましたけれども、すべて国营企業なのに何で証券取引所があるのか(笑)、国营企業というのはどうやってレーティングするのか、あるいはどうやって情報の開示をするのか、その辺、よくわかりませんから、余り経済の段階を考えた上で、一気に欧米的なものをつくるということではないと思うのですけれども、しかしそれなりのシステムはつくれるわけですから、それなりのシステムをつくりながらそこに入っていく。

僕は、アメリカの政府というのは大変偉いな、アメリカの学者というのは大変偉いなと思っておりますのは、ジェフリー・サックスという私の大変親しい友人が、この間ロシアでやって大変失敗しましたが、彼は二〇人くらい自分の手下をロシアで使っていたわけですね。ハーバード大学の先生ですけれども、ちゃんと自分で会社をつくりま

して、その会社には民間の人から寄附を受ける、ジョージ・ソロスが為替で大分もうけたのを寄附したという事でございますけれども(笑)、それが寄附しようと、それはトランスペアレントであればいいわけでございますけれども、そういうところで二〇人くらい大学院の学生みたいなのを雇って、それをロシアの各省に入れたわけですね。各省に入れて、各省の政策をサックス・グループがつくるというメカニズムをつくって、それでやったわけでございます。

これは余りうまくいなくて、彼は会社をやめて引き揚げ、今度ハーバードの研究所の所長になるとかならないとかいっていますけれども、その彼が早くも中国に行っておりまして、今度は中国だなんていっているわけでございます。大変エネルギーギッシュな男でございます、ロバート・マンデレというコロンビア大学の先生が今度北京で会

議をやるからといって送ってきた手紙の中に、ジェフリー・サックスの名前が一番最初に書いてありましたから、今度は彼の興味はそろそろ中国に向かっているということでございます。

しかし、そういうことは非常に重要なことだと思います。これは官あるいは学とだけではなくて、民間でも同じことでございます。少なくとも外国の証券会社というのはそういう機能が相当ある。イギリスにせよアメリカにせよ、そういう形の機能を非常に強く持っているわけでございます。

そんなことをいうと大変失礼になりますけれども、日本の証券会社でそういう機能を強く持っているところは余りない。大体、証券を売買してその手数料を上げるという発想でございますけれども、本来のインベストメント・バンキング的な発想で、プロジェクトに企画の段階からかわつ

て、それを組成して、最終的にもうける、そういうものがそろそろアジアとの関連では問われているのではないかという気が、私は非常に強くするわけでございます。

その意味では、大蔵官僚がそんなことを申し上げてはけしからぬといわれるかもしれませんが、余り東京のマーケットの空洞化なんているのは心配する必要がないんじゃないか（笑）。もちろんそこその自由化はしなきゃいけないのですけれども、シンガポールとか香港というのはある意味ではオフショア・マーケットでございますから、日本をオフショア・マーケットと同じにするわけにはいかない。シンガポールの人と話すと、シンガポールというのは常に日本の一歩先か二歩先を行っていることが重要なんで、日本と同じになったら、絶対東京に負けちゃう。だから、そのために時差もわざとずらしてあるし、一歩か二歩自由

化を先に進めることによって、ある意味でニッチ・マーケットをそこにづくり出して、それで商売するということです。

我々はある意味では大国ですから、別に我々がニッチ・マーケットに入っていくことはないわけでございまして、そういう意味で日本を香港、シンガポール並みにしろという議論には私はくみしません。ただ、お前ら、何かつまらない規制をたくさんやっているじゃないかといわれれば、そういう規制もあるでしょうから、それは自由化をしたらいいと思います。規制の緩和というのはそういう意味ではしたいと思っていますけれども、アジアではそれはそれほど重要ではないと感じているわけでございます。

いずれにせよ、中国についても、相当ワットとエクспロードしてきたものですから、これからある程度、どちらかというとバブルがバーストす

るまでいなくても、バブルがポコポコといろんなところで破れてくるという局面は絶対あると思いますので、そこは十分気をつけなきゃいけないという気がいたします。今までは大体日本人が出ていくと、それでバブルが破けるという感じになっておりますから（笑）、出ることはできるだけ早く出て、バブルは人につかませる、そのくらの感じでやらないといけないのではないかと、いう気がしておりますけれども、いろいろぎくしゃくするんだと思います。

中国は、少なくともこれからは調整局面に入るというのは間違いないわけでございますから、調整局面に入る中で、今度はベトナムとかインドが出てくるという感じだと思います。ベトナム、日本の投資が去年は五位だといっていました。華僑資本が当然最初に出ていくわけで、台湾とか香港とか中国とか、そういうところの資本が出ていっ

て、日本は五番目くらいで、ことしは恐らく日本がナンバーワンになるだろう、なることを期待しているとはベトナムの人は盛んにいっておるわけでございます。村山さんも行ったことでありますので、そんなことでベトナムにはかなり出てゆくんだらうと思います。

ベトナムというのは割に日本人と合うところでございますから、中国で商売をやった方がベトナムに行かれると大体ほっとするようでございます。ベトナム人というのは、契約するときっちり守ってくるそうです、ちょっと中国と違いますなんてなことを皆さんおっしゃっておられますけれども（笑）、そういうことで、日本人とはかなりメンタリティーが合う。これは恐らく儒教の伝統がずっとあるということでございますから、そういう意味ではメンタリティーが合いますし、既に日本の軽工業が割に出しております。

私も驚いたのですけれども、皆さん方ご承知かどうか、西陣の帯の大体九〇％くらいはベトナムで織っているらしいですね。これは商社が前から出ておって、榊原さん、それは当たり前なんだ、西陣の帯というのは全部手で刺しゅうをやるのですよ。あの刺しゅうというのは一人で八ヶ月くらいかかるのだそうですね。日本でやると、幾ら月給が安くても、社会保険料とかなんとか入れると、月四〇万円くらいにはなっちゃう。そうすると月給だけで三〇〇万から四〇〇万円だ。帯が一本一〇〇〇万円になっちゃうのですね。ベトナムですと、幾ら高く払っても月給が五、六〇ドルだから、これでやっと二、三〇〇万円で帯ができるのです、そんなことをいっておられましたけれども、そういう意味ではあれは委託加工です。日本の着物なんかもかなり委託加工で出ておりますから、最初は委託加工ということで出るんでしょう

けれども、それからマニファクチャリングが出ていくというプロセスです。

そういうことで、歴史的に見ても、二一世紀というのは恐らくアジアの時代だろうという気がいたします。日本の役割というのは、アジアと西洋の間の橋渡しというか、ここにはイギリスの方がたくさんいらっしますけれども、アジアでヨーロッパにおけるイギリス的な役割を果たすことではないかという気がするわけでございます。

イギリス的な役割を果たすというのはそう簡単なことではございませんで、今の日本ではとてもできない。これはいろんなノーハウがあり、いろんな知恵があり、その歴史があり、結構うまく立ち回らなきゃいけないとか、いろんなことがございまして、とても私ども、その意味ではイギリス人になれないと思いますけれども、しかしそういう役割を我々担っていく。プランニングとか企

画とか、そういうところをある程度日本人がアシストしていくということで、日本の知恵を非常に欲しがっているんですね。恐らく欧米と違うアドバイスができるのは日本だけでございますから、日本というのはそういうところに自分のレーゾン・デートルがあるんだということを意識しないといけないと思います。アメリカ人と同じことをいっても、向こうはアメリカをとるわけですね。ですから、そういうレーゾン・デートルを非常に強く意識しながら、日本的な商売のやり方というか、日本的なアドバイスをしていくということが、これから我々にとってアジアで大変重要なことになっていくんだろうと思います。

ですから、アジアにとって重要なのは、恐らく中国でもそうでしょうし、ベトナムでもそうでしょうし、インドでもそうでしょうが、みずからの文化、伝統は維持したいと思っているわけです

から、文化、伝統を維持しながら、しかもモダナイズしていききたい、産業化していききたい、そういう二つの非常に重要な問題を抱えているというところで、これは少なくとも明治の日本が非常に苦労したことですね。

実はアジアの人に、このごろ日本はいわなくなっただけでも、明治のインテリは、「西洋技術、東洋哲学」といっていたんだということを話しております。「ウエスタン・テクノロジー、イースタン・フィロソフィー」といっていたんだ。これは日本の近代化の一つの基本的な哲学だった。戦後相当崩れちゃって、両方ともウエスタンで、ウエスタンだけじゃなくて両方ともアメリカンになっちゃった(笑)。相当崩れちゃったけれども、明治以降のそういう基本みたいなものは若干いろんなところで維持されている。だから、チャイナであれば、ウエスタン・テクノロジー、チャイニー

ズ・フィロソフィーでいいですし、インドなら、ウエスタン・テクノロジー、インディアン・フィロソフィーでいいですし、そういう土地そのものの、地の物の考え方とテクノロジーを合体させるという発想は、恐らく日本人による方が出やすいと思うのですね。

いろいろ外国の方がおられるので差し障りがあるかもしれませんが、アジアの一つの特徴、特に東アジアの特徴は、多神教だということです。多神教というのは割に新しいものというか、違うものに対して寛容なわけです。ですから、一神教の中でも、どちらかというとイスラムの方が寛容ですね。インドとか中国とかいうのは、仏教とか儒教とかそういうものでございますから、割に多神教的なものがある。

多神教というのは、逆にいいかげんなんですね。日本は、原理原則がないといって非難さ

れるのですけれども、私はアメリカ人なんかに、原理原則がないのが日本の哲学である、これは多神教というんだ、要するに神様が八〇〇万ある、やおよるずの神というんだと説明しているのです。「エイトミリオン・ゴッズ」。「うーん」なんて顔していますけれども（笑）、そういうことで、あなた方から見れば原理原則がないけれども、人間の生きていくプリンシパルとしてはちゃんとあるんだ。恥だとか、そういう概念がちゃんとあるんであって、ただアメリカ的というか、西洋的なすべてに通じたような原理原則が必ずしもなくて、状況によってポリシーなりなんなりは変わってもいいんだ、あるいは、異質なものに対して非常に寛容だから、そういう意味では原理原則はある程度崩すということをやっているんだ。そういうことをいってございますけれども、俗な言い方をすれば、いいかげんなのが日本の非常なメリッ

トでございまして、いいかげんだからああいう近代化ができたところがあるわけでございます。恐らくそういうものを中国も求めているんだろうという気がいたします。

ですから、実はそういうメリットがあるわけでございます、別に日本が宗教を輸出する必要もありませんし、一方的に物の考え方を押しつける必要もありませんけれども、そういう日本人の多様なフレキシブルな、いわば一種の——ドイツのシュミグローという人と私、非常に親しいのですけれども、旦那さんはドイツ人でドイツの外務省に勤務、奥様がベルギーのルーバン大学の先生をやっておりますが、彼らが『戦略的（ストラテジック）プラグマティズム』という日本の今のシステムをディスクリाइブする本を書きました。日本人が十分戦略的だとは思いませんけれども、プラグマティックなところが我々の非常なメリット

でございまして、それを非常にストラテジックに組んでいければ、それが日本の強さだということでございます、余り変に一つの原理原則にこだわらないというところがいい。

ですから、中国なんかそういうことでやっていけばいいと思うので、適当に振りながら、朱鎔基さんなんかそれをやっているようでございますけれども、改革開放をやりながら、今度はある程度締めにかかるといようなことをやる。それを戦略的にやる。

そういう話については、我々の方が比較的彼らの相談に乗りやすい。もちろんヨーロッパ人というのは非常にしたたかな方が多いですから、ヨーロッパの方はそういう面も十分できると思いますけれども、アメリカ人は比較的ナイーブですから、なかなかそういう相談には乗りにくい部分があると思います。

そういう中で、我々のレラティブなというか、コンペラティブなというか、そういうアドバンテージを生かしながら、アジアの中で、私どもはどうやって外交をやっていくかということであり、皆さん方はどうやって商売をやっていくかということではないかということで、長々とおしゃべりというか、ダベリをしましたけれども、あと五分くらいになりましたので、何かご批判なりご質問があればお受けするということで、私の話はこの辺で終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

質疑 応 答

小山理事長 若干時間が残っておりますので、もしご質問等ございましたら、おっしゃってください。

問 ちょっと簡単に質問させていただきたいのですが、先ほど、中国は現在調整局面ということで、これからベトナム、インドが出てくるだろうとおっしゃっていましたけれども、ベトナムは歴史的背景からして日本人が出ていきやすいということですが、インドはどのようにお考えですか。

答 インドというのは基本的に仏教の国で、ヒンズー教というのはありますけれども、仏教的な物の考え方が非常に強い国ですが、この間、儒教の専門家の人と話したところだと、基本的に儒教の世界というか、我々の世界は、この世が楽しいという感じがあるというのに対して、インド人の物の考え方は、この世は非常に苦しいものだという考え方が基本にあるそうです。ですから、インドと中国は基本的に物の考え方が違います。だから、インドは輪廻の世界に入っていくわけで、そ

ういう苦しみがずっと続いていきます。悟りを開くと、その輪廻から抜け出して仏になる、しかし、基本的に苦しいものだという話ですね。基本的に我々の世界は、日本もそうですけれども、道教でも儒教でも大乘仏教でも、余り死ということに常に向き合わないで、割合にこの世の中は楽しいという基本的な性格があります、そういうことをおっしゃっていましたから、物の考え方としては、インド人というのはある意味では日本人のちょうど逆にあるのかもしれませんが。

アジアの中に出ていかれるときに基本的に重要なことは、中国人、ベトナム人を含めてですけれども、ベトナムは相対的に似ているというだけで、みんな考え方は基本的に日本人と全部違うと思った方がいいような気がします。アジアだから日本に近いんだということは全然違うのであって、中国なんかに出ておられる方はそういう

感じを持っておられると思うのですけれども、基本的に我々と全然違う。

アジアが西洋と違うところは、アジアはむしろ多様なところだという意味で違うのだと思うのですね。基本的に多様なものが共存しているエリアだと思えます。恐らく東南アジアは東南アジアですごく違いますし、中国も違う。ベトナムも、確かに儒教の影響、道教の影響はありますけれども、フランスに植民地化されたというプロセスもありますし、中国にずっと圧迫され続けてきた歴史を持っていますから、大変したたかな人たちで、我々のようなナイーブな連中は簡単にあしらわれちゃう可能性があるわけでございます。非常に歴史の長い、文化的に豊かな地域でございますから、そういう意味で非常に多様な国です。私もアジアを全部知っているわけではございません。しかし、専門家に聞くと、大体そういうことをい

います。それぞれ相当違いますよと。タイはタイでまた違う部分を持っているわけですし、ベトナム一つとっても、南と北は相当違うとか、そういう話です。私はインドなんていうのは一回か二回行ったくらいで余りよく知りませんが、物の考え方からいうと、同じ仏教とはいいながら、日本とは対極的な物の考え方をする。それだけに日本人には、特に日本の若者なんかには大変魅力的な部分を持っているように感じます。

そんなことですから、どこに近いということでも勝負するのではなくて、日本人は多様性とか、さっきいった多神教的な物の考え方とか、寛容さとか、そういうことで勝負するんじゃないかと思えますね、アジアでは。ともかく我々の物の考え方を押しつけない、しかしテクノロジーの移転はやるということです。

この間IMFの研修部長みたいなポストの人で

私の昔の友人が来て、アジアの国々についてトレーニング・プログラムをやるといので、それに対して、我々はトレーニング・プログラムといわないんだ、ジョイント・セミナーというんだ、それがアジア的な知恵だ、我々は彼らをトレインするというほどアロガントな考え方は持つておらぬ、我々の経験をシェアすることなんだといった覚えがありますけれども、アジアに対するアプローチというのは、そういうアプローチが非常にいいんじゃないかと思えます。

みんなそれぞれ非常に誇り高い人たちですし、中国人なんかから見れば、日本人なんていうのは、どうせ昔中国文化を入れて、漢字だって言葉だって宗教だって官僚機構だって、全部おれたちのものじゃないか、そのくらいに思っておるわけですから、我々もそんなつもりでへりくだって彼らとは接することが非常に重要なことで、第二次

世界大戦のときに間違っちゃったのは、その辺に對する錯覚がかなりあって、我々が何かアジアを……というようなことがあったのでしょうか。

だから、よく私が、アジアが重要だというと、榊原はアジア主義者だとか、脱米入亜だとか、脱歐入亜だとか、そういうことをいわれるのですけれども、そういうことじゃない。これは要するに多元的な歴史相對主義というか、多神教というか、そういうことであって、違う価値を認めるということじゃないですか。だから、欧米的な価値一本でアジアを切るということはしっちゃいけない。

例えばAPECとかEAE Cとかについても、APECかEAE Cかという物の立て方を日本人はすぐするのですけれども、僕の発想だと、全部入ったらいじゃないか、アメリカと一緒にやっていくことも大事だ、アメリカがいらないところ

やるのも大事だ、APEC、EAE Cの二つだけだから困るんで、もう一つくらい日本がつくって、三つやったらいいじゃないか。ああいうつき合いというのはできるだけ広げちゃった方がいいんですね。あるフォーラムでしかつき合わないなんていうのは、商売をやっておられる方はもうそんなことは先刻ご承知でしょうけれども、だれとしかつき合わないとか、そういう人としかつき合わないなんていういたら商売ができないですね。外交だって同じことで、だれとでも無差別につき合えばいいわけです。

問 一つ質問ですけれども、対外投資の話もありましたけれども、アジアの発展している国の視点から見ると、経済発展するために外国からお金を借りる。日本の開発経験から見ると、自分の国の貯蓄の方がある程度まで大事だといえると思いますので、その点はどう思いますか。つまり、自

分の貯蓄ではなく、外国からお金を借りると、コントロールもできなくなるし、今みたいに円高の場合には、円建ての借金でしたら、それも負担になる、こういう問題点もあると思います。

あと、アジアの中で考えると、日本は一番発展している国ですから、そこで特に日本のアジアに対する対外投資がふえてくれば、アジア各国から考えると、日本の力が強過ぎるような懸念が出てくる可能性もあるし、そこで自分の貯蓄、日本の経験が大事です。

答 おっしゃるとおりですね。今私どもがそういう知的支援の中でやろうと思っているのは、要するに自分の国の貯蓄をどうして活用しないのか。実はアジアの国々というのはどの国も比較的貯蓄率は高いですね。貯蓄率は高いですけれども、例えばベトナムなんかでいいますと、相当貧しい人でも、お金をためると全部金のブレスレットに

しちゃうのです。国家というものを信じてないですから、たンス預金をするか、大体金で持っているという世界ですね。中国なんかでも、貯蓄率は決して低くないと思うのですけれども、それが銀行預金にならないということです。

銀行預金をさせるためには、絶対インフレにしないという経済政策をまずとらなきゃいけない。それから、ある意味で貯蓄を育てる文化。よくいうのですけれども、戦後大蔵省にも日銀にも貯蓄奨励官というのがありまして、銀行局で貯蓄奨励官というのは大変重要なポストだったんです。ですから、僕はアジアの人に、貯蓄奨励ということを経営に必要があるんで、その場合にはどうしても少額預金を守ってやるというシステムをつくらなきゃいけませんから、これは絶対インフレにしちゃいけないということが鉄則でござい

日本でも郵便局なんていうのは伝統的ではない役割を果たしたのですね。郵便局が少額預金をずっと集めたということがあります。ですから、何かそういうものをつくるというのが一つの知恵ですけれども、今のところはそれがうまくいかなくて、結局たんす預金になり金になりということになっていきますから、そういう経済は基本的に不安定ですね。外資が逃げていったらだめなわけで、ラテンアメリカでそういうことが起こっていますけれども、アジアだって、そういうことがいつ起こらないとも限らない。そういう意味ではアジアも非常に不安定だと思っています。中国を含めて不安定だと思っています。

ですから、そのところを何とかするためには、中央銀行制度をきちっとつくって、しかも少額預金まできちっと集められるシステムをつくり、証券会社の人の前でそういうことをいうのは

大変申しわけないですけども、取引所なんていうのはその後だっていいのです(笑)。そういうことができた後で初めて取引所をつくって、庶民が株を買うという世界になるんじゃないですか。今のような形ですと、結局企業が買う、ちょっと集まってきて、ギャンプルをやるために株を買うという仕組みになっちゃいますから、恐らく順序が若干違うんだろう。

おっしゃるように、ドメスティック・セービングスというのは非常に大事なんです。アジアの国というのは、セービングス・レートそのものは高いのです。だから、要するにあとは国の信用がないということですね。しょっちゅう戦争をやって、国が興ったり滅びたりして、その経験みたいなものが蓄積されていますから、国に対する信用がない。ですから、きちっとしたシステムをつくる。私がいうとあれですけども、きちっとした

官僚システムをつくる、あるいはきちっとした金融制度をつくるということじゃないかと思うのです。

小山理事長 それでは、時間も大分超過しておりますので、本日の講演会はこれで終わらせていただきます。

ありがとうございました。（拍手）

（さかきばら えいすけ・大蔵省財政金融研究所長）

（本稿は、平成七年三月一四日に行われた講演会の記録で、文責は当研究所にある。）